

金子直吉翁の二十年祭に臨みて

柳田 記

金子直吉大人命 二十年祭祝詞

去る二月二十七日は人間金子翁 典を取り行った。高畑会長の挨拶 神となられてより早くも二十周年 の後に参集者百五十四名の中に福 田権宮司は金子翁七十九年生涯の 神戸オリエンタルホテルに於いて 遺業を祝詞に詳らかに讃え音吐朗 生田神社福田義文権宮司を招き午 々忽ち会場恰も水を打つ如く鳴り 前十一時半よりいとむ荘厳なる祭



ず嗚咽に 務せぶ一 シーンさ え演じた (この祝 詞は別記 する) 祭典後 遺族代表 次男武蔵 君より鄭 重なる感 謝の辞あ り、続い て菊水流 尺八道宗 家菊水湖 風師「赤 壁の賦」 を吹奏し 又片水翁 遺作の朗 詠を琴に合わせ「天下三分の計」 の書簡の一節をはじめ「天正の矢 叫びに啼け時鳥」外数句を美声の 神戸豊さんに依って御霊を慰め奉 った。宴ともなればこの日のゲス ト格兵庫新聞社々長木下繁氏(松 方、金子物語りの出版元)まず立 ちて金子翁の遺徳を絶賛、次に神 戸製鋼所会長長浅田長平氏とも厳 肅なる面もちで御在世中薫陶を亨 けられた数々の体験の追憶を語ら れた。又本日の祭典を司どられた 福田権宮司よりはこの日の祭典に 至る迄の経過に対するうら話等云 い知れぬ力のこもった奉仕談に一 同感激した。 斯くして昔懐かしい会員達互に 膝を交え大いに盃を傾け洋食皿を 叩いて交々故人を忍び欲談に時を 忘れてが定刻の二時半十河幹事立 って閉会を宣したので再会を期し て解散とはなった。おそらくこの 一日、金子翁もどこかの蔭でほほ えんでおられることであろう。 茲に誌上からも遙かに謹しんで 御冥福を祈り奉る……

三九、二、二七夜

是のオリエンタルホテルの一室 を暫し祭庭と設け、招き奉りませ 奉る、故鈴木商店大番頭金子直吉 大人命のみに、齋主生田神社神 職福田義文、謹み敬いも告げ奉ら くれは、あわれ汝大人命はしも、慶 応二年六月十三日山高く、流れも 漬き高知県名野川村に生れ出で、 幼き頃よりいと貧しかりし父母 の家業を助け、十二才にして高知 市の長尾砂糖屋の丁稚となり、十 五才の年には質屋に務めつつ、孫 子の文を始め諸々の文の林に深く 別け入り、人と成り、明治十九年二 十一才の春には、兼ねて望み給ひ し、憧がれの神戸栄町四丁目なる 鈴木商店に入り、柳田富士松の君 と共に力を合せ、主人鈴木よね 刀自を輔け給ひ、明治三十三年、 三十五才の春には、妻君徳刀自を わかえ給ひて、妹背の契も固く、 家のなりを修め、商の道も次々に 広め給ひ、自から台湾に赴きて樟 脳の業を起し、明治三十六年には 大里製糖所を創立、次で明治三十 八年には小林製糖所を買ひ受け給 ひてよりは、金属製煉、科学工 業、造船、船舶、鉄道、人絹、毛 織、セルロイド、染料、製糖、製 塩、製粉、製油、窒素肥料、ゴム 薄荷、酒類、マッチ、煙草等に至 る五十数社に及ぶ産業に手を伸ば し給ひ、日清、日露の戦より、第 一次世界大戦と、烈しく動く経済 界の浪に乗りて、その止まる処な き迄に、立派にしめ給ひしは汝命 の秀でて、すぐれたる商の功と称 え奉る可き事にこそ。さばあれど も汝命達が宮々と築き上げ給ひし 多数の会社工場の営業も大戦争お さまりて、世界の動きにわかに吹 き変り、荒き波風打ち寄せて、米 騒動、関東大震災、金融恐慌等次々に起りて、昭和二年、汝大人命 六十二才の年、遂にせむ術もなく 力及ばず鈴木商店の灯が悉く打消 されしは、いと口惜しき極みな り。 是を持ちて、汝命、如何にもし て元のうろわしき「風」を起し奉ら ると、千々に心を砕き給ひ、昭和 三年、山陰の海潮温泉にて「落武 者の世を遁れたる炬燵哉」と又昭 和五年、高野山に詣て「敗残の我 恥かしき青葉哉」又「影になり日 向になりぬ冬木立」昭和六年の元

【写真】

右はオリエンタルホテ ルに於ける金子翁の二十年祭 式典(兵庫新聞社提供)



且には「初夢や大隈秀吉那翁」等 詠み給ひし其の折々の感懐の中にも、いつかは立ちいでむ折を伺ひ 給ひしも、事志と違ひ、意の如く 成らず、日支事変、大東亜戦争と 弥々進みて、己己の暮しも日にけ に乏しく、苦しき事のみ多 き、昭和十八年夏、東京に上 京中風邪の病にかかり神戸御 影掛田の我家に帰り給ひて後 も、次第にみ体衰え、翌年二 月病の床にありながら、北ポ ルネオのセメント、サラワツ クのアルミナ製造計画のいみ じき志を立てつつも、病重く なり、御子達を始め親しき人 達の誠心の看護の甲斐もなく 二月二十七日未明、七十九才 をこの世の限りとも去り給ひ ぬ。 汝命去り給ひし翌年八月



日本も戦 に破れ、 國中の産 業も大方 荒野と変 り果てし 中に、汝 命が明治 大正、昭 和の永き 年月、多

数の人達をねむごころに教え導き給 ひし甲斐も著く、桜花の如く、散 り散りになり給ひし、鈴木商店の 元社員も、又書生なりし人達も、 次々に志を立て、勤め励み給ひて 己己の会社の営業も次第に立派え 行くにつけても、先思ひ出さるる は、これは専ら、汝大人命の高く 尊き教えによる事と、大人を慕う 心の弥増さきて、昭和二十五年に は、六甲山の麓に金子直吉翁、柳 田富士松翁の頌徳碑を建て、同年 金子、柳田両翁の伝記を編集し、 後には松方、金子物語も世に現わ れ、又辰巳会と言う会をよ起し、 年々に会合を開き、鈴木商店の昔 をしのび、「商人は物品の評価人 であれ」「事業と商売は常に身を 十字街頭に置き」と激しく論じ給 ひし事もあり或時は慈愛に満ち て、居間の仏像を語り給ひし事も ありしと、過ぎ来し方をそぞろに 偲び奉るまにまに、汝命去り給 ひしより、早や二十年の年月は流 れ来ぬ。 ここをもちて、今日しもみ魂み 祭り仕へ奉らくと、辰巳会々長高 畑誠一大人を始め、ゆかりも深き 諸人達、これの処に参き集ひ、礼 代の御食御酒をはじめ、在りませ し日に好み給ひし、葡萄酒、亀の 子煎餅、金平糖、干柿、リンゴ、

焼栗、バナナ、洋食に至るまで供 へ奉り、ゆらゆらとゆらぐ灯火の 彼方に、汝大人命が、家柄も学歴 も権力もなき身を持ちながら、国 のため、世のためと、烈しき商魂 唯一筋にSZKの風の旗標を七 つの海原になびかせ、三井、三菱 と相並びて、國中は申さくも更な り、世界の国々と貿易を交し給ひ し、雄々しき男意気を諸共に称え 奉り、又命は今の現にはなく、懐 しき土佐弁の声を聞く由もなけれ ども、汝命の導き給ひし商の道 は、神戸製鋼、帝人、播磨造船、 豊年製油、日商、大陽鋳工等多数 のいみじき会社の人等に引継が れ、其の人等の心の中に、今も今 も赤々と燃え続けて、人の心を振 ひ起さしめ、又家に在りては、長 男文蔵主は今も太陽鋳工に務め給 ひ、次男武蔵主は東京大学教授文 学博士と勤み給ひ、須磨子の君も 家の政を修め、又多数の孫達も、 それぞれにすくすくと育ち給ひ て、こよなき父なりき、やさしき 祖父なりきと慕ひ給うことも、 己れ神職おぢなれども、たどた どしくも汝大人命の一生の立てた まひ、遺し給ひし其の大よそを告 奉る状を幽世ながらにあな嬉し、 あな楽しと、御心安らに受け給へ と、謹み敬ひも拝み奉らくと申

す。(昭和三十九年二月二十七日執行)

諸君にみ魂をしたふ真心を

幽世ながら享け給ふらむ

義文

○辰巳会案内

本年は恰も鈴木よね子刀自二十 七回忌 鈴木岩蔵殿十三回忌に当 りますので御家様御命日を卜して 神戸 オリエンタルホテル五階ホ ールに於いて 禪宗祥童寺住職菅 宗信禪師を迎え法要を営み御両 所の御冥福を祈り且つ御遺徳を忍 び一同親睦をはかり度く存じます 就いては御多忙とは存じますが 万障御繰り合わせの上是非多数の 御参会を口管お待ちしております。

会費 一、〇〇〇円 服装平服 尚当日御来会の方にのみ粗供養 を差上げることになっています

○お知らせ

長らく、東京支部幹事として御配 慮下さいました松岡俊一氏今回神 戸に御赴任になりましたので引き つづいて本部の方のお世話をして いただくことに幹事会で決まりま した。